上

寛永十八年活字版

三冊之内 一

鴉鷺合戦物語目録上

一 和歌管絃郢曲事
一 七夕因縁烏假粧の間文使打擲の事
一 山烏太郎述懐而評定烏羽玉事
一 山烏異見幷白毀讃付敵方廻文の事

黒川真頼
待賈堂
黒川真頼蔵書
黒川真道蔵書
アカキ
よこ山

抜提鷲峯林に入りにハぐ数をもちる是広長舌獅子吼
汀にいろあれ清浄界に何ぞや流り玄妙の
おなし世ある常住の相なり仏にきゝくれ性なし然し
生本来の性也。眼入りけくも色をとまけ耳よりて
其声をきゝれまへ也ある時ハ憎愛の思ひを崩して
かくのごとくれば鏡裏の像なれどしある時ハ善悪の
おとおそしてあまりに住をなし樹下の風より。
来りてこそ悔らば去てらへらも悔とに気ぬ一切
有為の法ハ夢幻泡影のごし。椋天地開闢して人民
をはじめて生てこのかた三皇五帝の時一天其仁を
ふくしの徳を其徳をなしける王臣度を悔もらざる
ふたゝびしく孝行の思自然よふりし国家無為にしてよ居

する事久し。あるに周年に及でやうやく
おとろへ乱起てよもきまへり。仲尼老聃王道をお
あし黄石公子房武略を派ふ。四書五経ハ治をたて
五六韜三略ハ敵をかつ術を示すの也。治たるふ
ときハ文をもつて本をはかりて敵をしるとき
ハ武をもつて是をたゞしくす。故に治世利民文武を
もつて経緯とす。和漢の勇士古今の武将誰か文あり
て武ならざらん。何ぞ武あり文なからん。故に左に
し武を右にする。是二翼のごとくにしてハかなふ
事なし。然ども流季にいたりて文いよいよつたなく
武また武みだりになりゆく。かんしん君子をあざむけり悪
人心やむをそ孫む。無道をおこなひとして梟悪をなす孫と

畜類あひし飛禽走獣にいたるまで合戦闘諍をなせり
ちりとはしる也仍去ぬる烏鵲元年九月上旬に希
代の合戦侍りその濫觴とよびけり鶉
鷺はくもくしやうとそうけ鴉は張蘭林に烏あり東
南の依林乃麦玄とそ申けるの烏あとき男子に
生まれ思出りんすがたいとやさしくして色白
うつくしん女は能藝そなへあはれめたらんに契をむす
ばんやと思ふところに中鴨乃森より鷺はの
山城宇治乃正素とそ云ふ家名弟一はやさ男
文武二乃通君がたき秋に眼をきらしては武勇
にきはめしごとくめぐらし因縁によりてめて
先祖名乃屋うしみるよりこふむりの正素に息

女あれ婉転なるもなかれ世は梨花の春雨をおびたる
にあひ似たり窈窕たるよそおひ桃李梅は雪乃中
のまつひりしくなるにあらしくる八年よりわき
おとなびて能藝あるまひは本ちれとなやう也
あとにふぁそて猶そくたちぬはふざん人にかて
まり管弦呂律乃かまゝ世りこえなれしおふ
鳥乃跡をまたくひなし海ふびなき艶書のまぐけ
あれは青柳の糸乃東風よみだるゝそのよそおひ
紫式部が源氏をうつさし筆乃うつてをかくやと
おかえたり和歌は道におもむきてハ芦辺の露も
もまをもきびしとたれがなるす先祖によろく
鶯の色ごれよりのそやおりひめ乃ふりまさを

ふかゝらば浅からんと座りうげて深入り入玉めん
と也。能因ハ吉野山乃嵐ハ木すゑ中ま花をさそうと
ながめ。立田川乃秋の流入ハ紅葉を錦のとうこ
かふ花をながむまばんむねハ月ハむらん心
月よながれておれ花をうちてとがあり月ハわれて
思あらん。称念あまをのぞく乃ミふかゝぞ佛宗ハ
妙道よいふ流べきもの也。是ふよ因く神明ハ施を
禰宜志のふゝや八幡大菩薩ハ神の本を志う経き自
とも不老よ入りもよ入めしのたりしみ神の寧相が
宮隣をすゝめ。住吉大明神ハ和やさしむ気夜やうす
きと詠しましくて行舎君なりし神慮をたゞ詠
かりし給ふ。三十六人の歌仙人丸家持遍昭素性業平

小野小町躬恒貫之をはじめて皆是佛施の化現也。
さまばん人丸ハあのぐ乃寺我よ行くき和国乃末
言をうたへ。一首よ六根をそなへて五道をかわく和
寺れ本とい。中す南ゆ添たくこのたぐひ明ぶ
権者をいゑで在原業平小野小町なる卒しども不
たえまをたいまめとおまてちひの添入りたまま
とありほかれ中将ハ極楽世界の歌舞乃菩薩正観
音乃化現あまり肉中はひそうりしもりかしたる海
とぬむいへるとおまハみぐりに色我むさがおまに
たり。然まじ三千七百三十三人まちぎりてひとつ
をとおりさむと云。あまま志ならめや。我よおふ乃
世れ人のくうきまゆうぬたよ聖ををはむいひて。

我は歌所乃女として、かゝる仏果よいたらしめん
となし。住吉の明神に、小大ひ乃まひしやくと思ひ
そで岸乃ひめ松いく代へぬらんと詠じ。又祭乃
あそびなすてハ、天地の風光をわきまへ月やわら
ぬとなげく。むかしかぎりありて元業や年又月
廿八日いぬのこくに廿六歳にして、わうじやうをとく
れたり。竹ひぬ。小野の小町ハ大月乃みんげせうらく
きうりなりし時ハいたづらに人のこゝろをとなや
ましまへども、のちはなへぬまバのかたきにさまぎ
らひ都ゐさまよひて、其関寺乃ちとりに庵をむすび
びく野辺乃わりなふ余をさてへらまうさを海ゐ
ませし。を。弘法大師ほごらんじ倫くてみて
七月乃御説法ありとてめさせましふ弟れはわかさ海
をさらでてまいらざりし時ハ、はらひたびくなわ
志かば、めす事ハなのこゝろいらしとよびきんを海
しくふみてまいりおはえんふ、そのまゝらんじき
となりてむかし。是れでまし。只今ハ人おいとえま。
はなやかなる乃か、とりのかゝるとなりて。執心がゆ。秋
風の吹はてあるかめくゝ。歌詠ず。是をなかち
さうわなるりのかなしみず、おもとふふ家乃よとりわ
と世人ありしめ。権者のふるまひとおぼえたり。
ふくれば和歌の道は先、次に哥をあそばさまんとし、さ海
ぐ乃ないはかりある。四病・八病・六義・長哥短
歌・旋頭哥・混本・折句・沓冠・畳句・連句・隠題・誹諧・無心所

悪廻文云れ弁のうし里ふとしてる。又五音連声し。
五音相通して五七五七〻のけぢめくはしく。躰句
乃法ゞに親句乃わきぎとかくるし。次ハ三人翁丸業
の密伝十二人の他流自性縁乃灌頂ハ古撥が浦れ
口伝。住吉の忌箋令れ乃浮たへ。星乃云れ口伝。玉伝
乃秘事。千子撥乃深義。古今二字秘密周十二れ伝受。
仁和乃中ねが二義人丸れ云ふの墓小野が時代不
同るやうの習ありいくよ万かぎりはりぼと残里
ゝ。琵琶ハ延喜よりより八代。大納言経信より四代
治部卿乃居が弟子。住吉の清撥三昧が合せまでとう
あなたまで。白楽天が言とさぶ林し潯陽乃江の秘
乃中れがちぞや。管雅の三位が和乃字とうたひし

あなたのわらん座の床れ多りろ高ふをしとふりぞ。大名
新白家ふと云琵琶ぞ松家乃たりう抱ぶさうの名
器ふまでともきよふりかりてありてぞ
ひと筋の琴ハ延喜乃聖主より六代蔵人供奉賢名
より又伏白幕より三代乃弟子安藝乃法が孫のふ
が道ふ是。佛在世の大樹紧那羅がひきし琴ハ。琴
かせうが菩薩乃袖とひるがへし。あひし曲。始皇帝
の荊軻が客とまぬりまかなひし死湯夫人のつま琴
をかくやらんとおぼえられ。飛鳥もおちるげりと
ぞうけ給。さて又喜撥加陵頻源河馬毛一越調呂
の曲也。鶏徳平調放賓来気太食調新多羅角調太乃
太曲也。つるぞ乃太曲よありぞ拍子つきてなるひき。

盤渉調はいきる向樂器なる樂なり。めのとれいもく管
絃にみなさはらんはれ調子にうとくてきかなふ
たうしぼごの為といふきくちうりふまてにもくれ
乃ことにあらざ耳乃さと失とりいく肝要とも耳乃
そうぞんならざれば世とも人民無為かなりぐど
とし。第一に五音の事。宮商角徴羽なり。音にある
まのいの音もく越うしみえたり。宮は一越調土の音
君にならふ。商は平調金の音臣にならふ。角
は双調木の音民になぞらふ。徴は黄鐘調火の音事
になぞらふ。羽は盤渉調水の音物になぞらふ。又
音と四季方角呂律にとるに。双調は春東呂。黄鐘
調は夏南律也。平調は秋西律。盤渉調は冬北律。一越

調は中央呂也。七音乃こと又音に變徴變羽とくはへ
たんちは上無調ありあるたん羽を下無調あり
あたる。あるひは變羽は上無調にあたる宮也と
いふ。又上無調と林鐘調といふ。下無調と角調と云。
九調子のうち。又調子に大食調とくはへく呂なり。
七調子とは事。大食調と平調とはあえせて一とし。
上下乃無調をくはへて二とし七調子にあたる。
十二調子のうち十二列也。金石糸竹匏土革木なり。
金は鐘石は磬糸は絃竹は管匏は笙土は塤革は鼓
木は柷敔。呂律の事。律は雄鳳乃鳴也。音清長し。
呂は雌凰乃鳴なり。音濁短し。かれなくてひとしく
ども二つ川にかなし。樂記曰。樂は樂也。君子はたのし

みくそのみちをえ。聖人ハたのしみて其欲を
えふれ。愚をりくよくとせいしそれとえんぢたの
しんでみだりがはし。よく欲のてみちをわするゝと
きんぬ悔とりてえぞとなし。又曰。楽者含石の道。
管絃乃事をいふ。よろこぶる也。注陽の和光を云。
又曰。悠遊の君ハ楽をそろへて人をたのしましむ。觜
徳の者は楽をもつてみをたのしむ。人をたの
しむるハ其国にかくをたのしむ人ハ久しからず。
管絃紀云。大禹停笙をもつて遊鱗乃楽とす。亮箋
をもつて遊風乃楽とす。停を住也。亮ハ信也。笙
吹て風をとどむるゆゑ停笙といふ。管を吹て鱗を
信す。かるがゆへに亮箋といふ。いりふをそ書録

といふ物をはらふ。横笛ハ兵湯のしやう姫と
いふ女人吹しやうあまたども女にはあまつり
みかけれどそて吹ども。又郢曲ハ女をうたひなかとて。
たはふ飲をはらふためにかくる催馬楽う郁。風俗
なんどうたひゐる中にも。催馬楽乃名川。まくら川。
白馬川。口竈山。田中乃井戸。力なる蟻。長沢なる律の
寺也。あをうね。竈乃子鷄鳥の雛波の海さそふ川也。
呂乃前也。又風俗大鳥なんどたのしむ事とて
ぞうたひたるになん
未二七夕乃因位をきけるの体ひちふ
ちやくれ事
女れよ緒ばの雛を第一れりそなへるまけ者也。

されば世にいふかの飛鵲と降りてうみめぐさち
の妙なるはこかの織絹までたぐひなき深らんと
て諸鳥の子どもかのうつやさしねは天の里へ
鳥こそかりてえんとのぞむ心ひにてもあるひ
ぎんとさらひあるひは名字なえしひくれだにさ
づうに翠帳のうげに江国をとくのふ家だちわ也。
喜去はたべ下よりいちてきしなりのかまはむやくを
見ぬ越とかまでおもひろげを達はく。後見乃鳥よ
このうしと聴ける。あま達八やまま夢法るうには
たぐひふきらひきらなきまさせすのふべきるなしば。
鵞鴦ゆいちよある浦中かもといへど。かれども
黒白色とくなるか迷鏡とはなふじくぞやとふよ。

先祖乃浦るりを今までさ死しめさまはそぬりとぞ。
史記に文を引て云、瓊よ夫婦ありて夫を遊子といひ
婦と伯陽と云。陽老と契るよ年二八の後陽の
旬也。此文乃心は、遊子十六さい、伯陽十二よりて夫
婦と成てたがひにまんざし世せ。ともに月をあひ
する事かぎりなく、常にも月の出る事を待て
寝ん里にさがひおりつきは月乃入る事をおしみて
高らまいまのがつ。伯陽九十九にして死せり。遊子ふかく
歎く月を形見と思ひける程に、ある夜伯陽鴉に乗て
飛行けれど、遊子あとにかなげみて百三まで死
せり。天星となりて鳥に乗りて天をとび行て、あま
の河を堂で川を隔てくらのふさまともかく

毎月山川にて水をあびなふ流よ水乃あがるまでにて
わざおこなずをゆるさまでたりぬといへども七月
七日よハ帝釈善法堂へ供気乃日ふて水をあびれ
りびしても是をわすうる東しをゆ願さる。業に一度
あふとさいてぞ人目乃たあふを一日一夜なる利し
烏鵲と鵲と羽をならべて橋とかけて牽星七夕
をかよハせ奉る利。是をかけはしといふ也。漢王
乃傳記ニ云。烏鵲橋の口より紅羽を出す二星は座
うさ乃すなり。何迄いくたりといへ共是ハ紅顔
ふハあらね共。私の義といひ伝へて羽乃字をよう
とをよむなり。七夕ハかゝる別の涙鵲は羽よそみ
て紅涙となるといへるはそぞかゝる七夕の玄書也

猶色なくうらうらうぐろひそやかでむこみなうんと
申しけるぞ。山城守ハなをく思ひよらざるまり
みぞいひける。其玄さそてハ我とききらふござむなを迄。
其侭なろばおしよせてうたひとりて恥をあたふ
べうらひかくるこそ無念やうよなぞあふ者ごとく
ふむらひてあんつまよ。ともなくくまうぎんなぞてちか
ちけるは。弦ども山城守ハさたのかうのやつとて是
非をいそぎれ候なり。其玄がのひあれめし使うひ
に下をも子息といふまのこらひまわた乃ちてん
のおくとほぶさうふかゝりそれぞざん人為の帰心
人をまさせたまふまでその身にそてんへども。あまり
ふうけ給んへぞ一昔餘てぞまひさ悔り侍まう

人丸たよりをうつしひらんせしいふうれしさとび
あがなをよりみて墨淵の硯をあらし鶏頭乃筆を
さしぬらし〳〵詠ミがちなる短冊に書みだしけるに
とうせるひ文をとりてかの姫乃めのとにかつ程
て渡あうびはやくも取まてよろこし思をせてまし
生死。姫なまよぞとそひとききて見るに。飛蘭林より
侍ごまう人へほいくせらふくといへもうすくなや
とそうふうちあうめてまそ々りめのとにあげて
見るに。あふさかおいのこみの湯乃いおなまげ見子
めもうきふと思へどもさひしまひ時ぞうでたまの。
よふ乃衣をうへしばし君にあふ詠ハ月夜をまう
壱にたてあくびうなりうるみにさう称ね短

乃穿るに。蒙誘さへ。色ぞそ流る中と成にかり。あふ
滌をなみだのふかき川とりう。あし川ころるんの
やみ。たどりくてうぶ事れあど。あわとだにもう
まね蕊乃世をうしみ。このぶめちぢぢり誰ゆへと。か
とつべき。たらり。こあくてあうしくうの栢木乃
濤門のかく。二采れ宮乃流す。恩みずまし比うくよ。
ゆく忽なき宛乃煙となげききん。今更ふて取弟
みえくまはくなんせしさてうさみぐて
壱をふのみ。さくれ白露の月のる
淵とみやそそ浮志川むらん
さしあり。めのと淺まし。なうくく延頸をぬれ七生仏と
やらんと晋銀の硯よむりひて白磨の紙をえて

よしやさてふちともなりね淺川
うき芽むすむあふせあらめや
と書て手習まなびけれぞ、おまゝとりて繼母に見せ
けるまで、むげにあさましなる念慈ぞせさりとておもひ
やむべきならんなし孫ぞも後もむれなびく世、ある
時繼母姫のありそありしまゝくんそられなくて河原
の方へあこがれて、ぞくゐまゝ手習に行あふてうましし
やはみまいらせんとて、わがかへねていゆきてさゝ望
きゝのちんの御納をうぞ玉へり思ふぞりそてぞこそ
とありてごの歌を書
うぞ玉にかくまぎさのりひあらで
我にはうつを私ぐらく絶を

あ御乃まそときりくふ事は、昔業平あるの歌生月
の里にしるしりしさくりのぬまくぬ時がらが形の
みそ持せし我女くらうりひ海見くたくずらし
かぞきさもなくれしのぶまかせれ御納乃まそと切て
生月野のまうむしきはれまりありらと
志のぶ乃みだれりぎりさしまひ
と書てとりしとま孫ひ又歌れらあれは、紋天皇
の時宇かうらい乃書我高乃羽ほ書てをくりくれ
ふ讀人あの里しをあるりの時羽をむしてぞかり
ぬきふうはして見ひらむれれんを海孫さりは、御まき
とん志まぬ思の色とあらはれとおぞえたりある
時梅ぐえはいへしくへ分たんぢやくを作害て心を

しきりに雲の風にうごかさるゝこゝちはゆりし。
ある時は菊苑に露の玉葉をむすびて思ひをのべ秋
の色ようきぬとうらみをくる音信たびたび成し
かども、其後は怨事もなかりき。山城守、雲玄が
文のかよふよしをきゝて、この程のくるまん毎にを
たみを落の外におりふにとて腹立して家中の者
のしらぬるりわれし絶ゑして、かくをぞいくさせんと
いひけるに、雲玄ぞ千鳥にくらいふ時ぞれ事
みは法文のかよひけるよしを殿のきゝおしめして、
ほうちの老のしらぬ事わたらず孫きをゝめてい
きしめんと仰ん、さだめて耳よるをよそでいさめ
みあひん色し、候事を承伏まじとて、しらをとうり

てゆりぬ。雲玄むことゆるなれそんじけれ千鳥にわ
をかされつゝ、ひしくちくちあしさとりしかくに
牛入川がみをおふせさるやうにのうくたん
くとして、縁辺の連ども世にかけさなうひみても
あり、山城を一旦こそゆくまうせめとぞ、文を書く
中間のうらすにもたせて、山城殿がかとへゆきて、
千鳥とさうらてひそうふわされ、見しせいのひふく
めてぞゆうりしけるは、うのひ中略よ行て千鳥こそ
く雲玄ぞゆなかりしも千鳥は川の北かゝりう
あさましてかうりきるに、法のひきとめて無故実
なる拝すそてうかたこなた立めぐりくるを、山城守
忍法あてざれどこそは穏安し事よと思ひて、

そのまはりくの者ぞ。おれみうごへ。くくせ。さぞ
まといひふれぞ。かうぶ讒訴とびのし聖て。よこね
せてなりく死ふてもぐれおどおやちやく恚ろう。
山城守使よむろひくいふやうハ。其の者が至り
ふしかへりくさ連きら猿くかさらいもしくて。
かり者のいぶせさ。ちかをむおう連ば。よそ目を海
そりてき偷盗とれりし。人口をもぐうしずして
そうらつを賤ぞ。ふ係まひ乃はたなさ。舎弟れきる
あさいはぐくとみるも人がましりば。雀乃巣よ
ふけむ叔を見て剩手ぞのちぢうのむざん乃ゑ
ごく。係ろすりあまふたうん堂ゑうとうさめそれ
さん米をひろ斗市町をめぐりてハ菓子をあらす。

海しくふあ連合詮自性乃風俗おもさばりわ方ふ
をだよきらふんり。さ連ばとてかしもとおよし
とも思ひぐいざもが山城守といふかどの著れゑん
ふおらんとや。おはく種くう乃なもうぎんをちか正
なるがいさん弟一れやりおもとろひかくめてぞ
をひそかにかふゆ
弟三山鳥乃太郎ろ西川るそといめんく坪定
うぞ玉れゑり
さる程ふおりつるほうひそうく祇園林よ海て。
うりはう次弟を激と地まの空れ。玄太あふい
かりて茶うぐひのかまんやでみなまで。我をわき
と思りんあさぐハはぐけやとりふまくふとり

太刀をはかせて。甲冑に行てしなんと出々給ふ。
浅見冠者かゝりを袖にすがりて。むほんの始終
さらに漏入はらぬ。者ども科をあやまる程にそこ
よそのかまへなきてありけり。ひとまとびいり
まんてはんくの鷺ありせしたまさまいれて八。秘
のうへの法ちかなるを。しはりおかしめしとも
まして浅目の弓矢は法なしけるを。世にまでおぼえ
ことそとしてまゐらせ。二法の鳥は抹あり。祢ぐると
さだむるめんくこのよし。申て。ことあれまして。
あけくせ給はりかくといひあひ々所に。山鳥
太郎。ら孫のはのそこまれの。ちかをけさまれし
ふるまふ三まひしあろの甲ばは緒をしめくまのかれ

の太刀かよせていふくびかなるり。矢一二百
こみ捨て。大弓捨て。しもあれにあるよふそかゝ
て長やまもまた世く。おいだせしそ其まはくれ
なきとりかくにくしもん弟一ありて所なふうさ老也。
うまたお宍山鳥のなふがしとそ。弓矢をあて流鳥の
かくとあらがうるりのかし。しうくり老乃除兵すま。
名字かと知ぼふだん在京ありま。先祖精急奥州の
合戦の時うとまたのれ太たりまする人りしまで
けらば。立ねのさくありて親乃時。あれそびらふ
わかくのおほ利ば共も武勇と定代ともあく小口
ぶとの鳥れいさづけられ。跳芸にありていてぶ運い
くまんたいを事せりなりふがか見くわらりん。

事かきてハいえんとえめくらせるに山鳥の古巣
かあいなひの蔭をみくるりけ乃かけりやかんび
乃かろきやと自然のれをおさひきて云めんくの
法ごの旋とわ山鳥歌のほだいきん備ゆりしくいかでれ
そなわ竹ひいやらん霊いふ山鳥の里りし出て
まらハあくきつけれなるひあ連とも是ハ法まる過
さるふぎひかなを思ひながら音をきけがりなきば
こらへまてざんいは山がけ乃わかまはしそふや
しくもうさくなりをもんらんさきまでおもくすとて
来鶯といへど鶯の若乃戸ひらく初音をとをやく
きく杉里りけ垣の梅のみわひとをあれし紀雪
とのこ余所にあやまり死ぬるまでも庭の木をゑ

みなかめ夜りしなをまば山時鳥と誰よりさきは
実秋乃月かしのゆふぐれけるる声をも弟まうさき
秋の雨と思ふ迄に鏡よ似たるるりと法げけれる
人とおくてちりぬる奥山乃紅葉のよしぶをを枝
のこなかめ冬ハふりそめし今朝だふく人のまる迄
法るみ山乃里の雪れ夕暮乃梅のり法さ時鳥侍
の氣のせんえいえこらんどざるふは三十一字乃言
乃ふんぎ拆んふれよ母せ夏も其といやしま都にも
至まれこしなりでいえつけ実ふまでれ根乃法も庭
ぬさしそゆふあれは月どもゆそてくらんおえま
一ちうけたまえりてよそのまれ見てとも枝ど
法りしいかやえそれが昊兄なんどして侍

わうじん。武勇の名ハよの事にハかゝりてさう
にふせうのことよ記ぬべす。受領ハ。親までハし。者
仁よわらじ。限もありけれども。弓矢の道に
名をえたらば。ひさしくはつたへ。後乃数ふを
よびまいらせき。まさしくたえしずとも耳にとまりてさいはい
も作。伝まで武勇の手本の様にやがて作がまさりて子
孫ハ様がし。藝もうら縁をあとれかゝりふうくに
らん人。先祖孫ふ孫そうし。他に似ざるとうや中事作。
継で下主乃たとへにを。蛇乃名とばちいさ名れ先祖
ららふまがしてそとてめんくいのしれぞんじ
たびとも人。あやかる様くして後やんべきぜい
きちふよみてうしあし世中世で。武勇れやしぶれ。

誠名ありわわて大方よすゝげなるゆゑ又我
く武様乃無益なることよあらね事しと
うけ給ん。おやうれる中し世でとて弓矢八幡を
御罰ハへ。むねに海さまほどぞ孫ゝ。ふせう述懐の
不存まてハたび。臭残臭様名の川まを進去て不作
の果なれば。大集経乃十二年と見るにを。高姓ハ孔
拜よりさらさ。下賤名猫擾よりも身たり。貧窮ハ撰食
よりきかばハ悪。先世乃宿報とそしんじつしく
人へ。本意いさしをけさものく分際をしらに続す
にあがりまちなる所とやぞうみてん。世なくぶりて
物ごくにさうしそひまけいりはわらそハちあ。人が
物といへで。我しくなかれざるをよくみてこたへ。

員外なりしむかしのひくゝなまさずてさふさへ耳をはなふさ。
却それなかりし貴方ハ末世の逆のうしろをとこ程なれ
えらまでてりん。嗚呼かん孫い紀よおりて賢ハ聖よ
むとめく時代かうそら古る為なりしかバくをいえ
まて大きがりいふりなり。さればみと義をいふ粋
みやまそけまど落着の大事乃物かな。せんぎまち
くみして一ぢやうをば。或ハあふぎよりぶまて勢
みそかにとせく。天がらちよを水みもまとのふ。
或ハけふぞまちて当国乃勢をもよみしてからあ
りしふよせんといふ。又ちうおろよきいきんみハ
当時ハ無為をさうれとれる時ふるも。雅言ふ悔か捗
きる合戦理をとらなかりしまくる事や得らん。上

さいをかふりたまりがしき諫方さいはうをあらそで
小家乃一賢ふを嫖をふそさせてやむべきなんど
いふ。されふあるも然。さいをひとり。やミなすまず門
むぞ玉乃ねうちをせんといひ得まる所なし。ある
烏のいそく。夜のしろぎなまりれ抱あをだに。むかし玉
といふなふ事なるらん。むかしへ売りわ。玉をくれえ
がうしをいへぞ。又ある烏乃いそくぞれもむかし玉と
いふしくむ。秦乃始皇に三れたりほか。烏角生鋒
烏羽玉也。烏角ハさいの浅の也。それをもちて川海
をわたる氷。水双方へ三ぢやうだちかり乃く。玉鋒ん
始皇の外戚せんそ新宮よわ是とはふふ。此わその
きどくハなれをとりむかしぞ。又玉むかしの道なりん

どいふりはきて左傳ぐのごとくありてや
事是なほし。烏羽玉え呉済よりを天乃烏とび
きたるまニ乃つぞされあひざまる玉是より
さむ光くろくして世界くらくなにくる。始皇乃
ちやうぐんま燕忠といふりのあり。大なる家をは
くりてうの中に穆それ金山を玉烏是をくりん
とて家中に入時。中くろ城家の人ちまちり。首の
たゝ松とゐそうちより烏をおひ出し。袋よこめ
よのたま哉うぞひ之烏とばあらしね。この玉殺よ
ある時を召あかく殺を出せば。くろし。始皇秦乃
武王といくさを起し。なきんとせし時。此たは玉を
出されぶちまちるくらくなりてかげ乃かくれ。是

よ皇里む車にふをかまも烏羽玉と申せといへり。
めんくつなきぞきを吐て是種とりみぶしる
摩ふかゐてさのこあちらにせもありなん。詮索の評
定をはそぞへおしてぶうたん居衍るすぞいくさ
乃とくそぞめふあるふ吉やとぞのひあひくは
御中山烏の呉剣集白毀讃在身方廻文乃事
あるみ山烏乃太郎いくんどもはぶさふ中にて是を
ちかまきていゝくござりしなり中。事うまさども
五言と乃こにもそりによまり承存ふはとそても一
りんひはししちいんおゆし。大事を初ほせら
まんびうふなまぐりえそふしかはべき武蔵國八月を
うつしをしまでの歯國とかよかまともだくさいの

せいかなれバし。ゐ中乃大ね小さ。生田の森の鵜濤つ
乃せう駿河手孫ををんくん城なし。他门ふとりて
を鶏山名蒼庭るゆく後う見てばく紀たのひたり
なんどはまとうしざれ。よのきそのわ同人のかさ
ぐさいくらをはなし。かくとふまらまじはなど
なりば安三月をめぐらきを世あつまは成し。は
せいまそいあれ。中鴨乃森をぞ二重三重ふをなら
海りして。鴨の一门あれうちの名乃どくにして
ミなもとをき家なし。次第うちなんどのなずいも
をきし一つ拝べなりたきを利わわ。たとひ志あかきば
ともよくあのほどをさだめて。けいを仏道てうく
うたぐみくさそんじ作まじ。先めつ家をりつく

思ら進んへり。ぜいふ。ミなこの美田地へ丁同じ
ゝ海やうく言しのバ。ある鳥居をとび都をど
ありて海うきるさていたく中鴨ちや森のみども
とうきさ志後よとり。扉がぶのい名ぐらあげてず
まをたる出て用ゐのいくの外かさびしくは。まず
みてんなどり。記あれかなしさはいげまもさだ
うふへ思まけどんへども。都うち乃了思ようだ
とりふさいさあるらんとてとく海里なわぢくり
玄云り志よえんかりふゐ龍わかしくにふ進て
あんかんか宝それだいりふをせねかれやうにと
おりふ。山城ちかいふやうハ。前世をみなるふいやう
華 かく久しくなえてげんくとうどの次。いぞて左衛

とあげて弓矢にく旅に至時分ごとにかはさくゝの
ゆゝやとく海までせんもうせんともにそのとお
のがきぐし。河のまき下まで出しもて驚れ
みるすの一歌にとけふまでをたそく自他あんあん
なるやうりはもうゝひんへうしもいひ〳〵けれぞ。
山城やまきぎんあかと春にそんじていふ。そうじて此
鳥めぐびろうむ孫んまごくに存あひぞ。此方より
だよとくとこのきたうり法がたりみし。に此弓矢
之孫がに所さんそひたわ。御しふいさくうもよ々
おと兄ゆんべきにと服立しけまで。此本の事をる
とふとかくにもやましむのうち。よをさうせてれ。法
くる業をわくしまづ玄玄なためんと内書とぞ法ら

本虚く々。劣魔け機を存れ御ゝだそれなのぐう心庭
と御さいやしせしめはゞろのくもくまうう。一ろうは
ふ所まひのくもんだいよりおこ所志うわといへ
ども。恥をふそあらは家よ。ちやちやくのとがいさ
まうれり。黒白色とゐぶみやもいそをもかまさる
ゐるなるによ内くなふぐし兄法くる子細あり。おか
まひくそゝとつれもつおがゐ屋うしぼと書てぞ送
ゝ所。祇蘭林には中鴨よりまをするべきあずと云雑
税の初しも。此久と見くるてハ事とくしば。かう
さんもべき枝ごさんあまと思けまべ。勝よのりて
今乃庭のへまで。別して中鴨よ被と法らはゞ。
一朕日依打擲蹂躙狼籍已企發向欲令誅戮驚ろし子一ろ

黨并同意与力數。雖然政道无為代也。大法堅固時也。
為私弓矢以理指非者欤。依之暫廻思案者也。柳色黒
身穢所觸偏生臭氣云々。吹人号山城守場早化嫌他卜操
傍若无人号稱也。種々无盡悪言自讃毀他荒言。誠欝
胸弥天生前遺恨何更加之。若不思立方不顧大法鷺
子誅戮之疑何廻時哉。夫青黄赤白黒中多賞冥又作
詩被讀歌鷺錯欤。未聞先楓橋夜泊詩月落烏啼霜滿
天云。不云鷺呼。詩人長黒子歌仙黒主遍於之名未有
黒若死後天大黒天神誰不敬依然列古云烏有先生
之蓄屋訶貴力等而至何益云烏鳥之情乃反哺云孝
行第一燕冊道秦宮責乙度拜老母恩敷烏垂憐愍故
也貞女両夫之名執生涯為孀者義務世耻心孤限哉

等數者哉。次穿雀巣更足又非羌熟名尽鷺等赦奥本
於此烏雀使巣生死时梟憐无棄命住冥界被呼接同
烏振邪見威雖識與生悪業於地之蔵薩埵者專文然
聞挽引茲然与忿怒如車輪二而一也受附屬於切利
雲勵濟度於河梟燃衆生界无盡不知成佛引弘誓无
窮利生畢他江逢大紅葉於自氷移氷焦熱大焦熱夕
自炎餘炎在社稷踏孫宜神主之上被御号告央恠哉
厄之慎立倫盗熟名雖早黒絨非務伺奠鷺子白派可
謂是自非他雜言不為盡前詮鑿當家敵對思專前非
後悔誠弛弓脫甲迹可被泰林頭館不然有發向不日
成一戦嚴怨之謹言

八月廿五日　　芸云

山城守殿

とざすがにこれらわけまで広く人丹似てまあるは
くさと書てぞをくりたまふ。甲鴨かきらんぐひうち。
さうも木ぎはいてようぐいをかざめ。諺をまちえさる
きしまなるに述ひ木戸口ちかくさしよて言数よ
はんなひをいふ。術事ぞやここあふれり。孤蘭林
よわとて若をはくぐや。連曲すありとて。いそぐ
出むかひて文をうけとりぬ。山城守太陽乃中にそ
ひらきみれるに。文章手ぎくかしてちかごろまうん
がりたる斗おり。条々積みげて一円にどろつまらふ。
清色車し。ハ是よわとて津ひとばかりへまど。みな

かくふるふくしとおりにおなまば悪口ふみしま
て一紙を読ぞせんとお云

今般被投厳札則披閲之処文章参差志趣不明蓋以
所及於是令色読果標傍進發直悍大清紫薇奏云々当
耻當義終廻思案哉速押寄浸戦於賀茂川之清流挙
名於中鴨森之猜事可為勇士之本望之処為補眼前
恥辱擒空穏使酒為直傍輩数輩寄繋於広人儀自元
我等非仁非名雅意合戦有伺其義又募神識吐種々
自嘆偏然鳧鳥鴨蝙蝠燿黒色放掠々新言何琵琶粉
木風折烏名鳥作者讃之鷺鷺賞翫言未聞云自称弟
一也楓禱夜泊不出云月光霜色非白色哉万葉十六
波羅門之作多留於咲鳥胖腫天憧仁居

古今六

一　うきてふ大とそ名れ海さて水辺
きなさぬ我ちろくとそきく
鳥を大おそどりともいふ東観也。日論为事我をそ
ともいふ。物をいひふるしとわごろくとめそこり
むかしのこゝゆるかは。さして鳥をひめさらとはおほ
えば。我が詩云りを
蒼茫霧雨晴。初見汀鷺立なんど云。六帖には
海さる名淀の川瀬入りまち鷺れ
古てものてを照ね月ぞだき
高砂やゆ我ぎれとりの鷺をうき
ひとりまち禰じとわそふ内を

この詩ありのぐ。又宇治此うき舟あり
やすれきれ霧をだそぐむふをさえよたく深
鷺乃をがさし立詠りいとれしう見ゆるに。宇治
橋のなおくむみゑわきぬり。小柴津の舟乃所
くにけらびゆゐろなんどあり。是れ白氏新樂府云
君不見休所乃詞也。初秋の豔以源氏為本。絶者白
樂天孫人江口白女。黒髪紀白川之中也。紀是云雲云
霊辟嗟金絲白色也。烏有先生蓄屁調云雪山童子常
半偈剥本石而長傳云句見此一連也又烏鳥之情與
反哺使云白紀之志申盡孩孰云句見此一連也何隠
上一句者也孝行弟一事受父母氣以形者誰无孝心
心雖拔烏至孝則及背生之不可貶傍題子細哉燕冊

去月烏頭白文也貞女雖守義月冷風秋夜无端振浮
教字无也覺待不知雖見二夫一身然偏不受他邪不
見振鷺篇代皆賞白色又花嚴法花色云花嚴赤色法
花白色只是芬陀利花白色蓮花故也依之天台白色
無色本尺外佛傳法論背後若說所以白鷺池哉經頁
耳白馬也佛白衣観音亦白山權現亦道佛道内典外
典賞白例不可勝計文然聞挽紛飛雖貴思任君猿方
之様和光同塵之利生藍出藍青亦宿霧纖鷺殊勝既
雖分論別而一往使也云事不少諸亦總座而若于社
恩從惑我等一數水口なふりし延喜聖代之勅紀
忍首但五位氣世以无其澄青鷺信濃守號方為令遺
集此形奉總任右石字者也異敵治罰時被云二社之

荒涛先放矢飛鋒清亦也此此子細異默時且似券權
且如振噴而途不同流合默自他手並依之早雄若鷺
死生不知僻者号弦打矢凡系待總者也進發於及遲
怠有欲企自足於参紙面有限不能盡志趣恐々謹言

八月廿五日　　正素

清庄部

と書て犬々宝来る状と張蘭林りしぞ清らけり
々成玄玄ひらふ思るにあんまお遠さく乳色東
おわけ達でめんしくまり於う思ひつるすぞ也
いひあひ々成さ私わど不中鴨かはいそ出て方々
ふくまひぶんにその状こりいしく
東山張垂抹東亦流云有不顧分際事色不乱仁義先

放埒咲他貴我思甚慾若先日有尾張子細与恥辱之
者為散其憤猶一家他門無単当前可發向云云彼玄玄
老一門廣而与力多勢也非面々御扶持全難補今度
折角于馬方々玄来之時定而雖可被待冬依之不致
假不云季末三日以前京著作揃清派作者可存列戦
之御恩者也覇禁難龍山申有恐残客寧群輩暫辞風
爾更堅翼陣可預云哉一味合力然也惣劇纏頭而
志東西附節也不具謹言

八月廿五日　津守正素

孫蘭林廻文其状云

玄玄獲大夏定而蒙為山城守正素天上也正素哉貽
大廣勇士之誉畏人仍雖欲当遂恥思而移時難而送
蘿蔦独不榮絲松上于大玄玄不当他義矣者何乃与
於是以京馬衰慊輔郷勝交一時之門散慎於仲秋之
風不備謹言

八月廿六日

茅又両方与力領状・擬持・梟自稱・寄軍官位・姓名
悉刻事

さるほどに正素はくわいの廻文とりめぐらす方々に早
竹光一門・寄族の山科・木乃の里・松ヶ崎の淵水の
汀よりあき野原の所の驚あとく見及ばしと上渡ある
為し・当国にありては・鴨川白河をさかのぼり
又・川島羽とひの森又宇治のまきのあめんく・
ちんつ河いとわもひ・大のかき川を驚れ気つ出のやう

なまけは淀川のながれをあさくくふまくだる。水無
瀬の渡をうちすぎて。うどの高濱ざん屋こや。江口。
とりかひ。ほいたの渡。みをつくさしりば。難波がくの
西くれ。ひとすぢを上洛あるをりからば。生田の森に鳥
済づ多路まできめのむらんどれと。おせむれひく
さうへらゑゐしとふ数く。森林ハ鵜鷺きん入おいの
地をある。しませうと古今よひあだ。松原ハ一ゑん
正素姫志内れ任名なるゐし。まづ。さて乃松原ひか
の松原こや乃松原。まうの松ろうこ川のこ松川
志川乃松ゑう。なうし道乃まいりうはきれ松えろ。是
終のさ八雲入り出さる可なれ。その御国こふまい
むらおがしきいつてとまい蒙内を圓くるとひぶん月

心のともがら。先和寺乃浦溜かん、よせてハ。あ
遊のさらどといかまうし鷺乃紀伊守。鵜乃越前守。美含
大炊助。鴈金。大納言。鴨ふとりてハ。海がも黒鴨。田鴨
もぐ鴨。山鴨也。鴛鴦。白鷺。赤がしら。おしもひ。黒鳥。
されまろ。鴫。田鴫ふ至てハ何くぞ。田鴫。海鴫。羽堀ぶくろ。山
鴫あんがいわしてゐがくへ成ふならば。たのゐわぢ
むらうひばぶり。手ゐせきさ遊羽。浴せうび。いゐかお
せゐ花ゐ気。鶉雲雀うそ小鳥交目といそく燕み山
つぐめ石ばむめ。ゐ名をたうきさ都ゐ鎮うしあゐ鶸
かくゞり。弓矢れみちをいさ志ろに。鶯乃ゐ羽ゐと
ひや。いすかまんおやく尾なゞの鳥。ひえ。ぬう。海しこ。
やすうろ。ひがらむしくひ。れあおどり。めじ路せん

ふう菊いでてなむさしび風情のもれ共あるうひ
あれ合力なる雀が一ぞく誰とぞ河原雀孫ゝない
やぶ雀まづうふこの粉むらり也犬とも乃嘆子る
柊若雀乃をなむるれかゝへも廻文をよぶこゑ々
そのたよりをうしぬ山中までさるりのはわと
思召て渡ふまでり頭をは悦喜中ゝへ其我ゝハ
るなげくぞつれ身なを。りてなごさを心足乃や
くうみ情くとうけたまりうだ。急ぎ足世気なるて
也云志なる鳥もいかふはあゝ孫とも我ゝハ同居
いさひ乃肴よふこ鳥ハ同名乃を事なをうをて
おもひしふきむおまね遠してゆくの外れ雀ハ
くまひ世急雲が先うひもふま行。楽園ハおひく

ふとえちやくあ述ど荊園のうさぐくと先をとうつ
されなうげ所来そこもと涼しきりのなまで。
一定うちそでうちなん。我と目にふけるぞ上洛なるし。
森乃車ハ大かさ鳥の志んさい乃地のやうれ人
と我もなぞ。森り至どる馬小おねてかゝる合力
あるなしとやはく氏せ田森鳥漂につが方へ又別而
状と候うの。是一方の取替ゆへ也。先當園よりたる
て八若柳の東岩瀬乃森并東衣手森岩田の森斤罡
杜常盤れ杜久我の自ぞ羽束ごろ乃杜束瀬乃もり萩
乃とり棹表むまさらハ名ある。出まざれて自在利。
鳥よ同心なきくぞや。まづ鳴乃大和志鷯備前博士
鷲庄清水谷山寡山鴫鷸出羽清楠定見梟の本江充

木兎むさゝびは日暮夜鷹ちかづけり馬浦島があけ
てくわし菖蒲や雁りふくらんはく道春吉とき
しく州名、務めう田志とくもむ附馬津ぐこひなる。
瑠璃びえ馬むく名高近名志めれえうぐれん東里國。
志としりとりてれ赤志として、そうのりしらみそ
でしつま東さらの勢をされとして、源山忠岩の抹たる。
各ともしちまれしてすこし又時分ありてわさ成る
ともおかしそよまとて青玄耳へ里やうおもやうを。
あくにふくろうの云、我ちがていうりそめふを
白昼にたちわさまで鳥きたいのかしぶと見うけ
さる様みしありまでとめきさけびわらひ仏めり
さし、宮客役なまぼとて他をいやしむべきあり

あらば、のさらしくお難も此、そのとく世によそぐれ
多かるに、老子さけひさうく孔子にうしなくぢうたる。
然ども誰の縁にしあざなりとおきん何ぞへさう
のそしなとくえへん。東さらは聖人のちやうかん
ぞうし、卑下なきや事なまども益者の目もと
またるしく、珠えり眼老人に似た梅え、木まきうの
つくやう病名ふまま達成所也、兄ぶ後はさ難事な達
ども餓鬼のん、よう也、志せげなま生涯を具え。
あはれ名とありてはのりありとけと鳴、老若には
死をはぐる、是教犬をよふ。鼠ずみとる事猫をず
かしくなとるに、鷹に似たり、又鶏と名付ねまば
通力もできて、人をもふらの使るにてんまのごとし。

されバ神通自在にして夜陰なりも見る事可能
達の天眼にもことならバ即座にあやしみを現ぜ
しめんずるの奇特をさしこめそのかミ昌黎が潮
州におもむきし時とおりにまで藍関の雪にいり
なんでひづめをとゞめ進むのぐんをはげやして
おくもんまいをうんてみえたりと城までかり
しふ韓湘あちまちにきえうせていたく去年擁葉の
中に現ぜしむる雨の八句あらうしめ候へたるの
かくのごとし又広えんまよかくして今ハ今日
の事しみよく。またも泰嶽によとたんて家のかく
あるる雪藍関擁して馬すゝまずといひてども
深入しむをびて東西へまうまぐらそれにしこみの

窮屈をてん都んにまうびがちち盛ハもんぜんと
してゆきちとうしふかひあるひを突天より雪をふ
らしめ、日光をもふち猛火をもさ源若の言川が感
に所してあへぞく人精にまじてうぞ、性を書て年月
を送る。なんぞ虚空自然の形ならん。山林に住し
槐市しあそぶ三男一行九思一言海りのくさりがり
かびかくじ常事なく佛法流行初祖大師のなぞの達
をくみて教外別伝の在ふ川が、今ハ昼数ハ捨つた
かきむくひをうくるをいとふと極じて欲するかし。亡
大恐孤あり参をを受回不見而進を疑ず。本工気が鼻
悪玄沙の迷罷にしたまんで。又世界の罷をはくり
て解脱をば昆盧の項上をふんで救足をあげず。衣

祭の理地には一芸をもうけず。向上乃一路佛眼も
うかゞひがたし。仏見法見ともに是妄見。誰か正見
と此来迷は邪寿三毅一致うかへれあしのごとく
あらそいへども。あとにさらんでまのれべきは
佛教なれ。真俗二諦内外両典かさのごとく存分す。
我おいやしくも名れ紙の行迷りはたぬからず
を思ふまへ同心無量のまなちるかく弓矢の義
理なれば、とて不存へかりーてやうき求りを玄妙
月記をみえうるうかづきていなくこの大将すそれ
山城国などの敵にひとげかをかうじきやいで
まろうらみして武具まふきんとかふあらさだめ
ふやといふ方を候早。九月中日。祇蘭林よ案内に圃

乃將んせまくむ坐こ眠とふめんだうれあるふ
まゝしこふ一手二ろ陣く叢ゝ兵との幕乃紋。思ひ
くのあひだ流し。夜のまみちくたり。おいく
の勢ども丈世法どひて数をちうた。正慶が与力も
はどひぬぞれせいまづりふ二千余騎有利。主あど
ふ義列あり。正慶が云。当世れなりひ。弟まで流なれば
いての成百性町人をはくるうざふらひてなふじ
あずち各の成。今度乃合戦希代の珍事なる易定而
後記ふりとまのる名て。凡下乃者どもをたのこてそ
後難はやしの氣名て。氏名字官途咸よくくたて
まゐる。又源平両家れみかまをかわのでかくまれよ
さるゝひるま迷れ。一代のまをたるむ。それ力みまい

くまひまばん〳〵とれ奥い御しむるりのけれ。始
せうといふ名うりしば。いりふを足かくを紀しめして
悪到のおもてみぶらなる名りうずと云。萑乃荻大
成る名み一おふ萑丸乃紫をそめてしよりしとふ生
されど。或ハ十二月の絶るりしちなとる。或ハ古歌の
あら浪ふよせ。又ハりしよみをめへ〳〵名の和。一番
ふれ口。御位禾王胡臣登信。青鷺信濃守神主紀下長
宗。露絶。伊豆守山部紀臣長命。鶴越後守白鳥胡臣宗臣。
鳥金大納言荊田胡臣将文。菱嶮大炊助常世紀臣足
臣。鴉庵中将雑波紀臣安好。鴨助芦原胡卜申冬。鶴形
鶏惑冊治紀臣年右。鷺常力先生河原紀卜須但味村
小次郎。巨勢紀臣教剣略孫次郎。田魚秋沢。氷鷺の又良

鶉仲冬。鶉丸良。大君の友行。雲雀三郎。荻原宮登鶯少
将。椋原紀卜好教。爰に清勝寺乃塔。鳩信紀後飲浅黄
糸の腹巻して。そがだのぼうしめて。鼻頭し。蠛王小
因丸あせて長刀かるさせ。ほらくれ鳴うちつき来て
云。荒鳥乃とらばおうくしらひはお。我お一名字あり
うぎりてう宗たまわうば。は心かとなくは。しくふ
ほちくれ鶴の荻太宗葉翅をまてハへん共。おう
ふき莫太うそまてうひくしく羽飛ぶ。矢一二枚
ひでハ抱ともせざる上捺の君まてハ。さればたとく
はうりてかり城中へ入りう。翅をへだくまん乃
本たやくそつしくてつひすらずくかくそうり
打はおて繊そてらんばる外向するひまもんりど。

近年田舎は東海の内にて農業を事として世にある
のやうすでんめんとりあつかひやよくなりし作もやう
とく風情もちうふしてたふれぞとをいはしまた六月
の土用よこそし乃米穀は和布をよりまて荒稼して
そのまゝの数を得ることて秋の貢乃いたしくらし
と云民百姓みなとふ志あめは稲・世禄なんはゆたる老
にそ侍・八木ありきて千俵もを得て人も志せん然猿
あるまよりく作付ら承なしせいへだ・出城ある大小
よろこびさんは鳩を与は法るりき八幡の御家閑に
てれそれ入てやさむ・御安祢へまさぞあり申し入
ては是を使者にふまをし中は・名子相手今けいせ
めんと存乃豪に・文御珠は悦喜申し・しやうらう

法あるる事らく粉入へん。いてのよ海一方とばた安祢よ
なふぞ室いふうぶくとまやうおうしるれ・足袋
残されとしてまづりに二千又百余騎だとひ漢の
つそりのなわとも比蹟までハいのくあるべきとぞ
いひあひきる祇薗林り比善到のすとまきて
あまくいそれなり玄宏のことを名字よくく
たてにならとて善到を付承まい鶉衣湯つ射搖田
畑居仲春馬子二郎五差同二官李眷鳩大和るる大島
鞍居猴い鶏隠尉将士之鞍居之対・山高判皮赤深紋
伝長尾・出羽法持定光鶉水主司水柄常葛騎鳩兵衛
気糖向鞍に如意鳥木工之若畑居法傑・木兎菽次良
角明目筒為平又宮吹田春未若馬源又郎鐘作希代・

持牛ゑ平内ゟ官車将氏是鵺守殿損政羈小太良国
中宮愛宕殿御知しと以て色人が渇しける孫の官
途交領をし大臓姦到乃あ一万三千余孫也此外
月小宮枚を志ゝれ雨まらの風慄誠に心氣を乞れ
押てハしらんとうしおくりしこの田島にむて菊
田らうぜきし絃耳れ森にいて見きし目より
ありそみくさ乃梢をもうだハ名乃赤き乃眼をと
くだりつ虎し瀧小あづまよりあふ道者也

鴉鷺物語上終

110X
488
3